



雛人形

寄贈品コーナー展示開催

3月2日(火)~3月30日(火)

1993年 3月 2日(火)~ 3月30日(火)

■女の子の節供として行われている三月節供は、上巳(じょうし)の節供といって古く平安時代にまでさかのぼることができます。

宮廷の貴族階級から次第に庶民の間に浸透していった行事で、現在のように雛人形を飾るようになったのは、室町時代後期以降のことです。

■人形を作る技術は、顔や体を白く塗る胡粉(ごふん)の技術がもたらされてからで、江戸時代になって庶民も雛人形を飾って祝うようになったといわれています。次郎左衛門雛(じろうざえもんびな)と呼ばれる人形が江戸時代半ばに流行し、これとともに雛人形が広まりました。次郎左衛門雛に次いで広まったのが享保雛(きょほびな)で、女雛の大きくふくらんだ裳(も)や五衣(いつつぎぬ)に特色があります。

■平塚周辺で残されている雛人形では、享保雛がもっとも古く、これ以降さまざまな雛人形を見ることができます。現在のように段飾りが行われるようになったのは、おおむね大正時代前期からで、古式の雛飾りは平らな所に人形を並べました。

■今月の寄贈品コーナーでは、市民の方々から寄贈された享保雛、明治・大正時代の雛人形、大正時代初期の段飾りなど、時代とともに変わっていく雛人形を展示します。

■「せっく」は、現在では「節句」と書きますがこの書き方は江戸時代半ばから一般的になったもので、これ以前は「節供」と書きました。本来の意味は、節に供えるものということで、意味からいえば「節供」が正しい書き方といえます。